

## 1 枯葉剤とベトナム

### 1 . ベトナム民主共和国の樹立とフランスの再侵略<sup>2</sup>

ベトナムで枯葉剤がなぜ散布されるに至ったのか。それを理解するためには、歴史を少し遡らなければならない。第2次世界大戦末期、当時ベトナムを支配下においていた日本の敗北を契機として、ベトナム共産党の前身であるインドシナ共産党の指導によりベトナム独立同盟（以下、ベトミン）<sup>3</sup>が全国蜂起し、1945年9月2日にハノイのバーディン広場でホー・チ・ミン主席がベトナム民主共和国の独立を宣言する。同年9月中旬、7月のポツダム協定に基づき、日本軍の武装解除を目的として、北緯16度線以南にイギリス軍<sup>4</sup>、以北に中国国民党軍の進駐が開始された。旧宗主国フランスはイギリスの支持を得て復帰を目指した。解放されたフランス人捕虜兵らは1945年9月下旬に活動を開始し、同年10月上旬にフランスの増援部隊がサイゴン（現在のホーチミン市）入りし、フランス側はイギリス軍の助けも得てベトミン掃討に着手する。そして、1946年2月までに北緯16度線以南の主要都市を制圧し、同年3月5日にはイギリス軍からフランス側に主権が移譲された。フランスは同3月下旬にコーチシナ共和国をサイゴンに樹立する。ベトナム北部については、ベトナム民主共和国と初級協定を締結し、1946年3月6日にベトナム民主共和国をフランス連合内の自由国として承認する代わりに、北部への進駐を認めさせた。しかし、コーチシナ共和国の樹立などのフランスによる南部分離工作を原因として、ベトナム民主共和国とフランス側とのその後の交渉は不調に終わる。そこで、フランスは1946年11月20日にハイフォン、ランソンで侵攻を開始、後にハノイでも軍事行動に出る。この事態を受けて、ベトナム民主共和国側は12月19日に全国抗戦アピールを出し、第1次インドシナ戦争が本格化することになった。

### 2 . アメリカによる関与の開始<sup>5</sup>

フランスが樹立したコーチシナ共和国は、1949年6月のグエン朝最後の皇帝であるバオ・ダイを元首とするベトナム国の成立により、その1年前にフランスとバオ・ダイの間で締結された協定に基づいてベトナム国に併合される。この時点でベトナム国は形式的にはベトナム全土を統一することになった。1950年1月、ソビエト連邦、国民党軍を破り1949年10月1日に成立した中華人民共和国が、ベトナム民主共和国を承認する。これに対して、1950年2月7日にアメリカはフランスが支えるバオ・ダイのベトナム国を承認することを公にする。同年2月中旬、フランスはインドシナにおける共産主義者の指導する反乱軍を討伐するためとして、輸送機、トラック、装甲車、道路建設資材、通信設備などの軍需品の支援をアメリカに要請する。この動きを受けて、同年5月、アメリカはフランス、インドシナ諸国に対して経済的、軍事的援助を供与することを公約する。従来の「帝国主義、植民地支配に対するベトナム民族の独立をかけた戦い」に、東西対立、すなわち、「資本主義国と共産主義国」間の支配権争いという要素が加えられることになり、以降、アメリカは西側（資本主義国側）の中心国として、フランスへの支援を開始、この地域へのコミットメントを強化する<sup>6</sup>。1954年の段階で、フランスの戦費に占めるアメリカからの支援の割合は既に7割超を占めるほどになっていた。しかし、フランス側は劣勢挽回を目指した1954年3～5月のディエンビエンフーの戦いで敗れる。1954年4月26日から開始されていたジュ

ネーブ会議において、同年 7 月 20 日、ベトナム民主共和国側とフランスは停戦の合意に達する。アメリカとベトナム国は協定への調印を拒否したが、以降、北緯 17 度線を境にして北側にベトナム民主共和国、南側にベトナム国が対峙する形となった。

### 3 . ベトナム戦争<sup>7</sup>

1954 年 7 月、アメリカの意を受けたバオ・ダイの要請に基づき、ゴ・ディン・ジエムがベトナム国の首相に就任する。10 月には王制と共和制の政体を決める国民投票が実施され、ベトナム共和国の樹立が決まり、初代大統領にゴ・ディン・ジエムが就任した。ジュネーブ協定締結の後、2 年後に統一選挙が実施される予定であったが、協定に調印しなかったアメリカとベトナム共和国は実行しようとしなかった。

ベトナム共和国はアジアの反共基地建設を目的とするアメリカからの支援を受けて体制を維持していく。内政面では、ジエム・ベトナム共和国大統領は中部フエ出身で少数派のカトリック教徒であったことから、政権中枢を親族で固め、その他の政府役職の大半にも北部から逃れてきたカトリック教徒を起用した。土地改革の失敗<sup>8</sup>により農村部において社会主義勢力が拡大するなか、ジエム政権はベトナム民主共和国の工作によるものとしてアメリカから支援を引き出すとともに、都市部・農村部において共産分子の掃討を行った。1959 年 5 月 6 日には 10/59 法を制定し、国内で反体制的な活動を行った者に対して不服申し立ての権利も認めぬまま軍事裁判所で死刑を言い渡すことができるようにするなど、ジエム政権は力による反対分子の抑え込みに力を注ぐ。こうした状況の下、1960 年 12 月 20 日、カンボジアと国境を接するタイニン省で南ベトナム解放民族戦線が形成された。

1961 年 1 月、アメリカではジョン・F・ケネディ大統領が就任した。ケネディ政権は特殊戦争戦略を採用し、戦闘へのアメリカ軍の直接投入は控え、軍事顧問、特殊部隊によるベトナム共和国軍の支援に任務を限定した。とはいえ、1963 年末までにアメリカからの支援軍人数は約 1 万 5000 人に達していた。ベトナム共和国内では、1962 年に農民と共産ゲリラを分断するために農民を一定地域に集める戦略村計画が開始された。

### 4 . 枯葉剤の散布へ

豊富な雨量と年間を通じての高温により、ベトナム共和国の土地の 8 割以上は多雨林、モンスーン林、サバンナで覆われていた。具体的には、森林約 57%、草地・サバンナ 23%、沿岸マングローブ林 2%が占め、農地・市街地は 18%を占めるのみであった(Young [ 2009:59 ] )。1960 年 12 月には南ベトナム解放民族戦線が結成されるなど、ベトナム共和国内での解放勢力の活動が活発化するなか、国内の主な空軍基地の周囲を覆い、解放勢力の拠点、戦闘員、物資輸送ルートが潜むジャングルの存在は、アメリカ軍、ベトナム共和国軍にとって、大きな脅威となっていた。ここで 1950 年代半ばにイギリスがマレーシアで初めて草木を枯らす化学物質を用いたことが対応の参考とされた(Young [ 2009:62 ] )<sup>9</sup>。1961 年 8 月 10 日、中部高原地域コントゥム市社北部に位置する国道 14 号線沿いに H34 ヘリコプターが最初の枯葉剤の散布を行った ( Thong Tan Xa Viet Nam [ 2006:6 ] )。アメリカは、同年 10 月 13 日、ベトナム共和国から戦闘部隊の派遣要請を受けた (小倉 [ 1992 ] )。ケネディー大統領は、マクスウェル・タイラー軍事アドバイザーをベト

ナムに派遣するなど対応策を模索する中で、同年 11 月 22 日に軍事支援の増強を決定する。そして、1961 年 11 月 30 日、ケネディ大統領はベトナム共和国における枯葉剤使用計画を承認する (Thong Tan Xa Viet Nam [ 2006:6 ] )。1962 年 1 月 7 日、ベトナム共和国と同国軍の支援の下に、アメリカ空軍は枯葉剤散布を実施するランチハンド作戦(Operation Ranch Hand)を開始した。アメリカ空軍による同作戦遂行は 1971 年 10 月 31 日まで続けられる<sup>10</sup>。しかし、アメリカ軍による作戦終了後もベトナム共和国軍によって枯葉剤の散布は継続された(Young [ 2009:3-4 ] )。散布地域は、手元資料によれば表 1 の通りである。同表によれば、本稿で調査地としたホーチミン市における散布面積は 530km<sup>2</sup>となっている<sup>11</sup>。

ベトナムで散布された枯葉剤の種類、量、使用年についてまとめたのが表 2 である。ひとくちに枯葉剤といっても種類がある。枯葉剤は容量 208 リットルのドラム缶に入れられており、種類を識別するため、ドラム缶にはピンク、グリーン、パープル、ブルー、オレンジ、ホワイト、ブルーの色が帯状に塗られ、それが呼称とされた。グリーン剤、ピンク剤、オレンジ剤にはダイオキシン中でも最も毒性が強く、高い発癌性、催奇形性を持つ 2,3,7,8-TCDD (テトラクロロジベンゾ-P-ジオキシン) が含まれていた。なかでも、1965 ~ 1970 年に散布されたオレンジ剤は全枯葉剤散布量の 58.4% を占める。

直接同剤を浴びた第 1 世代だけでなく、その子である第 2 世代、そして第 3 世代にまでもその影響が及んでいると見られ、枯葉剤の問題は、戦後 35 年以上たった、本稿執筆現在においても、ベトナムの人々を苦しめている<sup>12</sup>。